

2006年防災教育チャレンジプラン最終報告書

記入日 2007年 1月 26日

I 概要

実践団体・担当者名	学校法人遺愛学院 遺愛女子高等学校 (担当者：増田宣泰)	
連絡先	函館市杉並町 23-11 電話 0138-51-0418 FAX 0138-51-7150	
プランタイトル	文化財である校舎を災害から守るために私たちにできること	
目的	自分たちが普段使用している重要文化財である校舎の歴史的・文化的価値を認識し次世代へ大切に引き継ぐ意識を高めること。 地域の方々にも身近に文化財があることを知ってもらい、地域の方々とともに防災意識を高めること。	
プランの概略	1. 文化財である校舎に関する意識調査を全校生徒を対象に行う。 2. 防災ボランティアパーティの実施。地域町内会の方々を学校にお招きし、文化財の校舎について知ってもらい、併せて避難場所としての機能も持つことを知ってもらう。 3. 校内で避難訓練を行うとともに、木造校舎の意義と保存の方法について講話を聞く。 4. 本校放送局が防災教育チャレンジプランの記録を兼ね、取材・番組作りをした。	
プランの対象と参加人数	本校生徒 840人 近隣住民 200人	
実施日時	2006年4月 より 2006年12月	
主な実施場所	遺愛学院 遺愛女子高等学校 構内 体育館、講堂(登録有形文化財)、本館(重要文化財)、旧宣教師館(重要文化財)	
連携した団体名、連携の方法	連携団体の有無	有り
	連携した団体名	杉並町会(本校所在地)
	連携したきっかけ・理由	学校の所在地のほかに、町会から避難場所として災害の際に校舎を使用したいとの要望が寄せられた。一度、校内の機能なども知りたいとの意見が寄せられた為。また、地域住民とともに今後も協力し合う事は学校の当然の責務の為。
	連携団体へのアプローチ方法	町会の会長・防災班長と実務上の打合せ。 回覧板の回覧時にプランの企画書の配布も依頼。
	連携団体との打合せ回数	5回
連携団体との役割分担	6月の「ようこそ遺愛へ 明治の学び舎と防災」では参加者の募集で、また7月の防災訓練では団体として参加していただき、一緒に放水訓練と初期消火訓練を行った。	

Ⅱ プラン立案過程

プラン立案 メンバーの 人数・役割	団体内のスタッフ総人数	7 名
	外部スタッフの総人数	名
	主なメンバーの 役職・役割	副校長 福島基輝 統括 事務長 増田宣泰 プラン代表 教諭 西谷優一 校内防チャレ委員会委員長 教諭 北川一義 校内防チャレ委 生徒担当 教諭 鷹沢夏子 校内防チャレ委 企画担当 教諭 大島 希 校内防チャレ委 企画担当 教諭 山田 泉 校内防チャレ委 資料担当
プラン立案に要し た日数・時間	立案期間	2006年 3月 20日 ～ 2006年 10月20日
	立案時間	1時間× 25回 週一回会議時間を時間割に設定 時間× 回
	上記のうち打合せ回数	20回
プラン立案で 注意を払った点 工夫した点	<ol style="list-style-type: none"> 1.在校生徒へのアプローチの仕方 2.学校外・地域住民への広がりを持ち方 3.地元官庁（消防署・市防災係・文化財課）との連携の仕方 4.文化庁文化財部への協力依頼 5.生徒の啓蒙になり、地域住民へも利益になるようなプランの組み立て 	
プラン立案で 苦労した点	<ol style="list-style-type: none"> 1.学校全体のコンセンサス（職員会議で議論、学校全体で取り組むことの確認と、委員会の設置の要請、時間割に会議時間の設定） 2.地域町会との連携（地元町会長さんへの説明・協力依頼、ビラの配布・回覧板にて） 3.自治体との連絡：市総務部総務課防災係、函館市消防、市教委文化財課 いずれの係でも協力的であった。 4.防災と文化財保護の両面の違和感の無い融合の仕方 	

Ⅲ実践にあたっての準備

準備に関わった方 と人数・役割	団体内のスタッフ総人数	7名
	外部スタッフの総人数	名
	主なメンバーの 役職・役割	副校長 福島基輝 統括 事務長 増田宣泰 プラン代表 教諭 西谷優一 校内防チャレ委員会委員長 教諭 北川一義 校内防チャレ委 生徒担当 教諭 鷹沢夏子 校内防チャレ委 企画担当 教諭 大島 希 校内防チャレ委 企画担当 教諭 山田 泉 校内防チャレ委 資料担当
準備に要した日 数・時間	準備期間	2006年 4月～2006年 10月
	準備総時間	時間×25回 時間× 回
	上記の内打合せ回数	20回
教育関係への 働きかけ	働きかけた教育関係者・ 機関名	函館市教育委員会生涯学習部文化財課 文化庁文化財部
	どのように働きかけたか	1.文化財を災害から守るための方策例 2.文化財保護法における防災の位置づけ 3.各プランへの参加要請（アドバイザーとして） 4.文化庁には「遺愛の文化財」と銘打ち講演依頼
	結果	1.防災の事例紹介 2.すべてのプランへ参加してくれ適切なアドバイスをくれた。 3.文化財調査官の講演により文化財の価値の確認ができた。
地域への 働きかけ	働きかけた地域の人・ 機関名	函館市杉並町会
	どのように働きかけたか	1.「ようこそ遺愛へ 明治の学び舎と防災」への招待と参会者 募集の協力 2.旧宣教師館防災訓練に対する参加要請 3.文化庁文化財部調査官の後援に対する参加依頼
	結果	1.回覧板にて文書を配布していただき、およそ200名の参加 を得た。 2.町内会長及び防災班の参加を得て、合同で防災訓練を実施 3.町内会長及び役員の参加を得た
保護者・PTAへ の働きかけ	働きかけた保護者・ PTA組織名	遺愛女子中学校及び遺愛女子高等学校のすべての保護者
	どのように働きかけたか	生徒へのアンケートを実施し、その結果各自の避難場所や災害 の際の生徒・保護者の連絡方法等があまりにもあいまいな為、 学校からすべての保護者宛に緊急にアピール文を配布した。
	結果	災害時の親子が落ち合う場所や連絡方法を今一度確認して もらえたと思う。

機材・教材の準備方法	用意した機材・教材	1.「ようこそ遺愛へ 明治の学び舎と防災」6月24日 体育館、マイク・スピーカー、文化財紹介パンフ、 2.旧宣教師館一般公開 7月27～29日 テント、パンフレット、机・椅子、消火用ホース、消火器 3.文化庁文化財部講演 9月26日 特になし
	入手先・入手方法	すべて学校の教材・資材を使用した。
	機材・教材選定の理由(なぜこの機材・教材を選んだのか)	
参加者の募集	募集方法	町内会関係；学校作成のパンフレットを回覧板とともに配布 参加生徒関係；校内掲示および担任を通しての周知、生徒会・吹奏楽局への依頼
	募集期間	2006年 5月 20日 ～ 6月 24日
	参加予想人数	150名
	実際の参加人数	350名 町内会 約200名、生徒 約150名
	募集方法の成功点	町内会；事前に町内会長等関係者と打合せができた事。非常に積極的に町内会が協力してくれたこと。また、災害時の避難場所等の心配事も住民が持っていたこと。地元新聞にも取上げられたこと。 生徒；生徒自身はボランティアをやりたいという意識を常に持っている。自分でもできることは積極的に参加してくれる。
	募集方法の失敗点	基本的には地域住民の皆さんに予想以上に来ていただけたので成功なのですが、町会長から隣接する2つの町内会にも声をかけたらというアドバイスをいただいた。本年ははじめての事だったので、所在する杉並町会のみ声を掛けたが、次年度からは他2町会にも参加依頼をする予定である。
準備で苦労した点・工夫した点	テーマの設定	文化財保護と防災教育をどのようにして結びつけるか。検討した結果、校内だけでなく広く地域住民に文化財及びその価値を知ってもらい、且つ住民の希望である「近く」の避難場所として使ってもらおう事とした。
	参加人員の確保	町会長と相談し、周知の方法としてパンフレットを回覧板の回覧に合わせ用意し配布していただいた。
	避難場所としての指定	町内会は町内に所在する遺愛女子高等学校体育館を避難場所として指定してほしい旨、函館市防災担当に申し入れた。学校でも避難場所に指定されることはかまわない旨の意思表示を函館市にした。しかし、函館市では防災計画が策定済みで当分の間指定できないとの事だった。学校としては避難場所指定の有無にかかわらず、地域住民にできることはする方針を固めた。

IV タイムスケジュール（プラン立案から実践終了までのスケジュールを記載して下さい。）

	プラン立案	実践にあたっての準備	実践
2005 11月			
12月	応募に当たっての立案		
2006 1月	プラン採択		
2月		職員会議へのプラン採択の報告 学校行事として取組めるよう提案	
3月		学校行事年間予定表への組み込み 学内「防災教育委員会」設置の提案	
4月	プランの概要を構築	学内「防災教育委員会」初会合（委員7名） 毎週一回会議を設定	
5月	杉並町会を訪問協議	週一回、打合せ	
6月	6月24日 「ようこそ遺愛へ 明治の学び 舎と防災」	パンフレット作り プランの具体的内容の詰め 生徒有志、吹奏楽局、新体操との打合せ	6月24日実践 地域住民およそ200名 生徒参加者 150名
7月	7月27日～29日 旧宣教師館一般公開 同 防災訓練（放水・初期）	ボランティア生徒募集 消防署・文化財課・防災係への連絡打合せ	3日間でおおよそ900人の 見学者。町会役員と一緒 に放水訓練及び初期消 火訓練。
8月		6月24日および7月27～29日の反省 校内生徒に対するアンケート案の検討	
9月	9月26日文化庁文化財調査官長 尾充氏の講演 「遺愛学院の文化財」 9月26日校内防災訓練実施	アンケート結果の集計及び分析 9月26日全保護者に対し「緊急時の避難先・ 連絡先の確認のお願い」配布	9月6日生徒に対する 防災と文化財に対する アンケート実施
10月		中間発表準備 パワーポイント原稿作成	
11月		全体の反省 明年度以降の取り組みについて 単年度で終わらせない為に	
12月		プランの取りまとめ	
2007 1月		最終報告書作成	

V実践の詳細 【B. イベント】(短期集中型のプログラムを45分を1コマとして記入して下さい。)

タイトル	ようこそ遺愛へ 明治の学 び舎と防災			
実施日	2007年6月24日(12:00)	12:45	13:30	14:15
所要時間	45分	45分	45分	45分
達成目標	スタッフ集合 物品の確認 掲示物掲示	参会者体育館へ案内 (生徒による) 各所スタンバイ	ビデオ上映(15分) 「明治の学舎」 吹奏楽演奏・新体操演舞	本館・講堂の見学・説明 (生徒による)
生成物				
進め方 (箇条書き)	各担当の教員は配置につく ボランティア生徒に指示	13:00 スタート 司会 生徒 2名 体育館の防災関係機能・施 設の説明	吹奏楽演奏(20分) 新体操部 演舞	本館及び講堂への誘導係 同 説明係配置につき 誘導および説明
ツール (特別に用意した もの)			ビデオ「明治の学舎」	
場所	体育館	体育館	体育館	本館・講堂

V実践の詳細 【B. イベント】(短期集中型のプログラムを45分を1コマとして記入して下さい。)

タイトル	旧宣教師館一般公開		宣教師館防火訓練	
実施日	2007年7月27～29日		2007年7月29日	
所要時間	45分	45分	45分	45分
達成目標	10:00 スタッフ集合 ボランティア生徒集合		杉並町会員と共に旧宣教師館の放水訓練及び初期消火訓練を行う。	
生成物				
進め方 (箇条書き)	旧宣教師館各所に配置 前庭に休憩所設置 11:00 入場スタート 15:00 まで 30分毎に生徒交代		09:30 集合 消火栓より放水訓練 (生徒・教職員・杉並町会) オイルパン上の火を消火器にて消火。(参加者同上)	
ツール (特別に用意したもの)	パラソル、椅子、麦茶等		函館市総務部防災課 函館市教委文化財課 函館市消防 協力	
場所	旧宣教師館		旧宣教師館前	

V実践の詳細 【B. イベント】(短期集中型のプログラムを45分を1コマとして記入して下さい。)

タイトル	校内防災訓練と講演会	遺愛の文化財の講話		
実施日	2007年9月26日			
所要時間	45分	45分	45分	45分
達成目標	校内防火訓練 科学館調理室より出火 体育館へ避難	文化庁調査官より遺愛学院 の文化財について講話を聴く		
生成物				
進め方 (箇条書き)	13:35 出火を想定 火災警報器作動 消防署へ通報訓練 防火戸閉鎖 避難誘導	14:00 講話開始 遺愛の文化財の価値(明治期 の木造校舎で現在も授業し ているのは遺愛だけ) 15:00 終了		
ツール (特別に用意した もの)				
場所	高内各教室 体育館	体育館		

VI実践後

参加者へのアンケート結果	町内会関係者； <ol style="list-style-type: none"> 1. 近くに住んでいるのに初めて校内を見学した。 2. 40トンの雨水と30トンの水道水は災害のとき有効だ。 3. 来年もやってほしい。時任町と松陰町にも声を掛けて。 4. 備蓄する場所はあるか。雨水をトイレの流し水にしているが何人分か。 生徒の参加者； <ol style="list-style-type: none"> 1. 車椅子の人とかいれば、私たち家まで迎えに行くよ。 2. 明治の校舎を今も授業に使っているところが遺愛だけというのは誇りです。 	
成果として得たこと	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生徒の防災に関する若干の啓蒙（保護者との緊急時連絡法、災害時の避難場所把握） 2. 本校に対する近隣住民の避難場所としての期待 3. 町内会との連携による文化財防災の可能性 4. 文化財としての校舎の価値の再確認 	
成果物		
広報方法	広報した先	NHK（函館）、北海道新聞、函館新聞
	広報の方法	FAXにて案内を送付
	取材にきたマスコミ	北海道新聞、函館新聞
	広報された内容（掲載された記事・番組等）	イベントの概要、当日の写真、参加者のコメントなど
	成功点	参加者を確保するには効果があった。
	失敗点	とくになし

<p>全体の感想と 反省・課題</p>	<p>当初は文化財と防災をどのように結びつけたらよいか、非常に戸惑った。校内で委員会が立ち上がったおかげで、様々なアイデアが出され、自分たちにできることを自分たちでしようというということになった。</p> <p>町内会長と話をして大変参考になりまた今回のプランでは大きな働きをしてくれた。高齢者の多い町内会なので、指定された現在の避難場所までは行くまでに困難を伴うとの事だった。お互い協力し合い、公教育を担う学校としても今後とも地域の皆さんとともに歩む必要があると考えている。</p> <p>生徒の多くはボランティア活動をしたいと考えている。しかし、我々が適切な機会を作れないでいる。今回のプランでは地域の高齢者とも触れ合うことができわめて有意義であった。</p> <p>校内でも改めて防災と文化財保護を考える機会を与えられ、自分たちの校舎の価値を再発見することができた。</p>	
<p>今後の予定</p>	<p>来年度以降の進め方</p>	<p>今回出来上がった近隣町会との信頼関係を今年限りでやめることはできないと考えている。当然地域があつての学校と考えている。むしろ、町内会長からアドバイスをいただいたように隣接する別の二つの町内会にも声を掛け実施していきたい。</p> <p>生徒に対しても今後とも防災意識を持たせるために、「防災教育チャレンジプラン」の公開されている事例を参考にさせていただきたい。</p>
<p>自由記述</p>	<p>是非実施してみたい 取り組み</p>	<p>奥尻島を中心とする南西沖地震が発生した地域ではあるが、12歳から18歳までの生徒にとっては印象の薄い事柄になってしまっている。常に災害に備えた授業を定常的にやりたいと考えている。</p>
<p>当初、文化財と防災という異なる取り組みをどのように結びつけたらよいか戸惑いが多かった。耐震補強やウオーターカーテンなどできそうにも無い。自分たちで何ができるかの自問自答がしばらく続いた。考えてみると、学校というところは朝から夕方までは関係者がいるが、夜間はほぼ無人と化す。その間は近隣の方たちが見守っていることとなる。</p> <p>町会長さんと話していくうちに、指定された避難場所は高齢者には遠く、遺愛で避難場所になってくれないかとの事であった。地方自治体では公立小中高校を避難場所としていることが多いらしく、私立の本校は指定されていない、市役所の防災担当に話を話し、避難場所として指定して良いですよと伝えましたが、防災計画の改訂を行ったばかりで当分の間指定はできないとの事であった。お役所仕事の壁である。</p>		

自由記述

2006年に新築された本校の体育館は、地下に雨水を40トンほど溜めトイレの流し水に利用していた。そのほか防火用水は合わせて60トン。清水は受水槽に30トンほど常にある。また、ソーラーパネルも3kwではあるが備えている。これなども災害のときに利用できるのではないかと、6月に近隣の住民に説明した。参加者は一様に安心していた。

生徒は案外素直で、ボランティアを日頃からしがっている傾向がある。むしろ、適切な機会を学校側が与えられないでいる。また、吹奏楽局や新体操クラブもとても張り切って発表してくれた。高齢者には受けが良かった。校内の文化財に指定されている建物の説明なども生徒は嬉々として誇らしげに取り組んでくれた。放送局は自主的に取材を重ね、自分たちで番組まで作ってしまった。

文化庁文化財部調査官の講演も実現することができた。重文・有形文化財に指定されている国内の学校建築で現在も使用されている建物は、慶応大学・同志社大学・龍谷大学と遺愛学院だけだそうで、そのうち木造の校舎は龍谷と遺愛学院だけ、中学高校では遺愛だけだという話が聞くことができ、生徒教職員とも一段と誇りを持つことができた。文化財の保存という意味で、次世代に引き継ぐには誇りを持つことが必要であり、それを十分に満たしてくれたと考えている。

防災教育チャレンジプランに参加する機会を与えられ、種々の事例に接することができ、また、逆に本校の防災教育のお粗末さを痛感することができた。学校全体でコンセンサスを得てプランを進めることができた。地域住民との信頼関係もできたし、今回限りでお終いにすることは到底できない。あまり大きいことはできないが、今後も地域とのつながりを大切に本校が地域の為に役立つのであれば、避難場所として指定されようがされまいが関係なく校舎を提供して行くつもりである。今回の取り組みは、文化財と防災という学校現場においては非常に特殊な事例ではあるが学校を離れて考えると、文化財の所有者には高齢者も多く個人で防災に対処するより、地域全体で防災に対処するほうがしやすいのではないかと考えている。

防災教育チャレンジプランに参加することを許され大変感謝しています。上述の通り、本校にとっては勉強になることが多々あり、またプランには関係なく今後の防災教育の必要性を強く感じているところです。細々ではありますが、地域の方々と今後もよき関係を保ちつつ災害に備えていくつもりです。